シリーズ回想 コロナ禍に学ぶ遠洋航海 104

令和４年度遠洋練習航海の航跡

海上自衛隊幹部学校副校長（前職　練習艦隊司令官）　海将補　小牟田　秀覚

１　はじめに

この度は「おやばと」への寄稿という貴重な機会を頂戴し、誠にありがとうございます。

先ずは自衛隊家族会の皆さまの日頃のご活動、自衛隊に対するご理解、ご支援に対し、心から感謝を申し上げます。

私は、令和４年度遠洋練習航海部隊の指揮官として、令和４年４月24日から８月22日までの間、遠洋練習航海に従事しました。

遠洋練習航海は、３等海尉に任官したての初任幹部を各部隊に配属する前に、幹部海上自衛官として必要な知識、技能を身に付けさせるために実施するものであり「①幹部として必要な資質の育成、②国際感覚のかん養、③友好親善の増進」の３つを目的としています。海上自衛隊が創設された昭和27年の６年後の昭和33年から、毎年度途切れることなく実施しています。

この航海は、米海軍を範にしたものではなく、その淵源は日本海軍にあり、連綿と初任幹部教育に注力しているのは、世界一の仕組みであると思っています。

初任幹部は、防衛大学校や一般大学から海上自衛隊に入隊し、広島県江田島市に所在する海上自衛隊幹部候補生学校にて一年間の幹部候補生課程を経て、卒業と同時に練習艦に乗艦し、実習を開始します。彼らは、遠洋練習航海期間中は「実習幹部」と呼ばれます。

昨年度の遠洋練習航海部隊は、練習艦「かしま」、同「しまかぜ」の２隻編成であり、この２隻に、タイ王国海軍から留学した少尉１人および実習幹部約１６０人を含む総員約５３０人の隊員が乗艦しました。

コースは西回り世界一周であり、横須賀を出港後、マラッカ海峡～インド洋～スエズ運河～地中海～大西洋～パナマ運河～太平洋を経て横須賀に帰港しました。途中、７カ国９都市（コロンボ、サラーラ、ジブチ、トゥーロン、ロンドン、ポーツマス、ノーフォーク、パールハーバー、パナマシティ）に寄港しました。

参加者がワクチン接種を３回以上実施するなど感染防止の態勢を整え、また、寄港中も各個人に感染防止措置を講じさせ、３年ぶりに外出や人的交流をすることができました。

しかしながら、欧米では感染防止対策はほとんど実施しておらず、外出中に感染し、これを艦内に持ち込んで感染拡大という危険は常に付きまとっていました。

航海中の訓練や寄港地での行事などを実施するため、感染拡大をいかに抑制するかということが苦心した点です。

２　航海中の訓練、寄港地での行事の様子

前述の遠洋練習航海の３つの目的に沿って、航海中の訓練、寄港地での行事などの様子を紹介します。

（１）幹部として必要な資質の育成

航海中の訓練は、艦を右へ左へ自在に動かすこと、火災、浸水などの緊急事態が発生した際の対処などです。これらはチームで対処しますが、実習幹部はチームのリーダーとして指揮能力を養います。訓練のみならず、息抜きとして艦上運動会などのレクリエーションもありますが、これらの企画、実行も実習幹部が実施します。

艦内生活を通じ、揺れる艦上での身のこなしやしつけなどのシーマンシップを体得するとともに、日本海軍が関わる海戦が生起した海域を航行する際は、事前に戦史を学び、洋上追悼行事を実施しました。これらのさまざまな経験を通じ、幹部として必要な資質を養いました。

（２）国際感覚のかん養

航海中は、積極的に沿岸国海軍と親善訓練を実施し、実習幹部に、他国との信頼関係構築の現場を体験させました。

特に、米海軍とは最多の４回の訓練を実施し、強固な同盟関係を実感させることができました。また、外交上重要なパートナーである英印とも訓練を実施し、わが国の外交と防衛が密接に関連していることを理解させる一助となりました。

世界の海を知るという観点では、インド洋、大西洋、太平洋の千変万化する海洋環境を知り、自然の美しさや偉大さを体感することができたと思います。また、マラッカ海峡、スエズ運河、パナマ運河といった海上交通の要衝を航過し、知識を深めるとともに、航海の途上、30カ国余りの陸地や、海から望められる約20カ所の世界遺産を目にすることもできました。これほど多くの事物を見聞できるのは、世界一周航海の醍醐味です。

（３）友好親善の増進

寄港地では、外交的役割も求められており、全ての寄港地において、政府、軍の要路の方々への表敬、メディアへの対応などを積極的に実施し、日本との連携の強化について発信しました。

特に、昨年は日英同盟締結１２０周年の年であり練習艦「かしま」はロンドン、同「しまかぜ」はポーツマスへそれぞれ寄港し、節目の年を祝すとともに、日英の防衛協力関係の強化を発信することができました。

コロナ禍以前は、練習艦「かしま」艦上レセプションを実施しており、今回は３年ぶりに艦上レセプションを実施する準備をしていました。また、市民の皆さまに艦内を公開する準備も限などを実施しました。窮屈な生活であったと思います。このような対策を講じてはいましたが、日本出国時から常続的に感染者が発生していました。

前述のとおり、欧米では感染防止対策はほとんど実施しておらず、外出すれば必ず感染者が発生すると予想していました。

とはいえ、遠路遥々の訪問ですから、実習幹部や乗組員には現地を体感させたいと思い、常時マスク着用などの感染防止対策を講じ、外出させました。寄港地の方々から見ると、マスクを着用した東洋人の集団は、異形の集団だったと思います。

寄港地出港後は予想どおり感染者が発生したため、感染者、濃厚接触者を速やかに隔離し、感染拡大を抑え込む努力を継続しました。予防接種の効果か、重症患者が発生しなかったのは幸いでした。感染者、濃厚接触者の隔離により、訓練に参加できる人数が減ったため、少人数で実施できる訓練の形に改めるといった工夫もしました。皆の努力により、新型コロナウイルス感染症との闘いを何とか制することができたと思っています。

４　むすびに

新型コロナウイルスとの闘いのため、一部制約はありましたが、訓練や寄港地での行事などはコロナ禍以前の状態に近いところまで戻すことができました。

実習幹部は、幹部候補生学校では、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため同期と密なコミュニケーションができず、コロナ禍以前と比べると同期の結束を深めることが困難であったと思いますが、本航海を通じ、同期と密度の濃い時間を過ごし、絆を強固にすることができたものと確信しています。

遠洋練習航海が終了し、約一年が経とうとしていますが、それぞれの配属先で逞しく成長しているものと思います。彼らの活躍を祈って止みません。

最後に、家族会の皆さまの自衛隊に対するご理解に重ねて御礼を申し上げますとともに、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

三八式野砲（富士駐屯地所蔵）

「自衛隊の学校・今昔物語」㉚

陸上自衛隊・富士学校（特科部）

野戦特科職種の紹介

野戦特科は、普通科・機甲科と同じく陸上自衛隊の戦闘職種の一つであり、対地・対海上火力の骨幹として、火力戦闘により、作戦部隊の任務達成に寄与することを使命とし、遠距離にある敵の艦船、部隊などの撃破、普通科・機甲科部隊の戦闘に協力する役割を有しています。

野戦特科職種の主たる装備は、りゅう弾砲・重迫撃砲、ＭＬＲＳ（対地ロケット）、地対艦ミサイルですが、対砲レーダーなどの観測器材も保有しています。

りゅう弾砲は数10㎞、地対艦ミサイルは百数10㎞の射程を有していることから、野戦特科職種は非常に広い範囲において任務を遂行する職種です。今後、野戦特科の装備は長射程化・精密化され、その役割の幅はさらに広がっていきます。

野戦特科部隊は方面隊や師団・旅団に配備され、方面隊には特科団や方面特科隊が、師団・旅団には特科連隊や特科隊が編成されています。現在、野戦特科部隊は、防衛力整備計画に基づく大きな変化の過渡期にあり、領域横断作戦の中核として、部隊の新編や改編が行われていく予定です。

富士学校特科部では、野戦特科職種の幹部を対象とした幹部初級課程、幹部上級課程、幹部特修課程などの一般課程のほか、幹部・陸曹を対象とした射撃指揮・通信・測量・レーダーなどの特技課程を合わせて19個課程を担任し、年間約５００人の学生に対して教育を行っています。

特に、幹部一般課程では、野戦特科部隊の中隊長、大隊長などとして必要な資質の涵養（かんよう）と識能の付与を重視し、将来の野戦特科の中核を担う人材育成に取り組んでいます。

また、学生教育のほか、将来の野戦特科の装備および野戦特科部隊の運用に関する研究業務ならびに演習における教訓を収集・普及する教訓業務も行っています。

野戦特科の歴史

日本陸軍において、野戦特科は「砲兵」と呼称されますが、その歴史は、１８７１年（明治４年）の陸軍創設から始まります。

当時の日本陸軍は歩兵中心主義でしたが、第１次世界大戦は陣地戦であったことから、砲兵が飛躍的発展を遂げました。しかし、戦後の恐慌や関東大震災による経済的低迷を受けて軍縮が進められ、砲兵も量的に削減されました。

満州事変以降、日本の軍備拡張に応じて、砲兵も急速に部隊が拡張され、軍直轄、師旅団合わせて約１３０個の砲兵部隊が編制されました。この結果、第２次世界大戦では、緒戦の攻勢段階において、大口径火砲主体による火力によって敵を減殺し、歩兵部隊に密接に火力協力することで戦勝の原動力となりました。しかし、戦争末期において、旧式の38式野砲を運用するなど、大兵力を擁する一方で装備の質的な問題点も抱えていました。

さらに、制空・制海権を失ったことにより火砲が戦場に到達できない状況も重なり、陸軍砲兵は十分な戦力を発揮できないまま終戦を迎え、１９４５年（昭和20年）のポツダム宣言受諾に伴って陸軍砲兵は解体され、歴史に幕を閉じました。

砲兵の教育を行う機関として、１８８６年（明治19年）、現在の千葉県佐倉市に陸軍砲兵射的学校が設立され、日清戦争後の96年（明治29年）、陸軍野戦砲兵射撃学校に改称され千葉県四街道市に移転、１９２２年（大正11年）、陸軍野戦砲兵学校に改称され、陸軍砲兵の発展に貢献しました。

陸軍野戦砲兵学校は、野砲・山砲・野戦重砲などを装備する野戦砲兵に関する教育、研究を担当するとともに、兵器材料の試験研究、典範の改定などを行い、野戦砲兵に関する戦法、戦技の改善向上、砲兵のための軍隊教育普及促進に寄与しました。

現在の特科部も教育、研究、教訓業務を実施しており、学校の役割は今も昔も変わらないことが分かります。陸軍野戦砲兵学校も45年（昭和20年）の終戦を迎え解体されました。

その後、朝鮮戦争を契機として50年（昭和25年）に警察予備隊が創設され「砲兵」は「特科」として再生しました。砲の用語を使わなかったのは軍隊色を薄めるためだったそうです。

創設期の特科は、米軍の翻訳教範で育成が行われていましたが、経験と自信を積み重ね、陸軍時代の長所も勘案した「野戦特科操典」を編纂し、米軍教範には記述がなかった「野戦特科精神」が追記されました。この「野戦特科精神」は、現在の教範「野戦特科運用」に通ずるものであり、不易流行を垣間見ることができます。

そして、日本陸軍砲兵の襟章の色である「山吹色」は、現在の野戦特科の職種色となっているように、用語や習慣などにおいて、日本陸軍との連接性も読み取れます。因みに山吹色の由来は、当時の火薬成分であるピクリン酸の色が黄色だったことからという説が有力です。

野戦特科職種の将来

富士学校特科部は、野戦特科のビジョンとして「領域横断作戦の中核たる強靭な野戦特科の創造」を掲げています。

令和４年12月に安全保障関連の３文書が改定され、わが国の防衛力の抜本的な強化が打ち出されました。

野戦特科職種は、その中においてスタンド・オフ防衛能力の強化の中核として、わが国に侵攻する艦船や上陸部隊などを脅威圏の外から対処する手段である長射程の対艦ミサイル、高速滑空飛翔や極超音速飛翔などの敵が迎撃困難なミサイルなどに関する装備研究・運用研究を推し進めるとともに、それら新装備を使いこなせる野戦特科隊員を育成する使命があると認識しています。この使命を果たすため、野戦特科ビジョンに基づき、学生教育の充実や将来装備研究などに係る各種施策を策定し、それに取り組んでいるところです。

「夢なき者に成功なし」という吉田松陰の言葉があります。これは、夢を描き理想を持つこと、理想実現のための計画を策定することで夢を実現させることを説いているものです。

現在、富士学校特科部は「夢と創造」の言葉を掲げ、職員一丸となって知恵と創造力を発揮して野戦特科ビジョン「領域横断作戦の中核たる強靭な野戦特科の創造」に向け進んでいます。

１９式装輪自走１５５ｍｍりゅう弾砲

「筆者紹介」
小牟田（こむた）　秀覚（しゅうかく）
・昭和43年生　神奈川出身
・放送大学（平成19年卒）
・93幹候
・職種：射撃（艦艇乗り）
・主要部隊歴等
S61年　海上自衛隊入隊
H６年　一般幹部候補生学校入校
H22年　護衛艦あさぎり艦長
H28年　第12護衛隊司令
H29年　海幕人事計画課長
R２年　第１護衛艦隊司令
R３年　練習艦隊司令官
R５年　幹部学校副校長

きずな

今年も終わろうとしています。いろいろなことがありましたが、印象的だったのは夏の酷暑です。統計を取り始めてからの１２５年間で、最も暑い夏だったそうです。

人類活動の結果、地球温暖化は確実に進んでいるようです。温暖化だけではなく、海洋酸性化、生物多様性の喪失など、人類活動が生み出した地球規模の問題にわれわれは直面しています。

しかし、地球や人類の危機といわれても自分事とは感じにくく、国の内外を問わず利害が絡んで足並みは乱れ、有効な対策は難しい状況です。併せて世界には戦争、紛争、対立などの人間同士の問題も絶えません。地球や人類の未来をある程度予測しながらも、目先の利害に左右されるのが人間の営みのようです。そんな人類活動の根底にあるものは、欲望だと思います。もっと欲しい、もっと知りたい、もっと良くしたい、もっと、これにより人類は進歩・発展し、現在の生活がありますが、便利な物に囲まれ、病気を克服し、宇宙にも進出しています。欲望は人類活動の原動力です。ただし、それは自己中心的なものです。人間の生活が良くなる一方で、環境を変え、生物を絶滅させ、人間同士で争い、格差や不満や恨みも生みました。

「知足」ということ

運営委員　古賀　久夫

欲望には３つの特徴があるといわれます。①他人よりも自分優先（自分の利害に敏感、他人の事には鈍感）②満足を知らず限りがない③無くすことはできない、という３つです。際限のない欲望の追求は、自分たちの首を絞めることにもなりそうです。そのため、先人たちは、時や場所を超えて、欲望の危うさを探求し、同じような解に達したのかもしれません。欲望は諸悪の根源のようでもあり、人類活動の原動力でもあります。そんな厄介な欲望だからこそ、その本質を知り、適度に制御することの大切さが説かれたのだと思います。

人類の未来が明るいものとなるのか悲惨なものとなるのか、分岐点となるような現代ですから、ほどほどの欲望「足るを知る」の心持ちが大切になるように思えます。

それで種々の問題が一気に解決するわけではありませんが、地球や社会、家族や自分自身にとって随分と幸せの感じ方が変わるような気がしています。

「知足」とは「求め過ぎず、分相応のところで満足する」というような意味で、老子の言葉とも釈迦の言葉ともいわれます。先人たちは、時や場所を超えて、欲望の危うさを探求し、同じような解に達したのかもしれません。欲望は諸悪の根源のようでもあり、人類活動の原動力でもあります。そんな厄介な欲望だからこそ、その本質を知り、適度に制御することの大切さが説かれたのだと思います。

人類の未来が明るいものとなるのか悲惨なものとなるのか、分岐点となるような現代ですから、ほどほどの欲望「足るを知る」の心持ちが大切になるように思えます。

それで種々の問題が一気に解決するわけではありませんが、地球や社会、家族や自分自身にとって随分と幸せの感じ方が変わるような気がしています。

美佐の新国防論 153

アブラハムの子孫たち

私の祖父母世代の人たちは神武天皇から始まる日本の歴代天皇をそらんじることができたと思いますが、今、若い人がそれをしたら、変わった人に見られてしまうでしょう。しかし、それはあくまでも私たちの現在多くを占めている価値観にすぎません。

世界の信仰地図を眺めてみると、その３大勢力はキリスト教、ユダヤ教、イスラム教ですが、実際その神は共通であり、３宗教とも預言者アブラハムが「信仰の父」であることも共通しています。

「アブラハムの子はイサク、その子は…」という系図は、これらの宗教の人々は誰もが習っていることです。アブラハムは子供ができず妻の提案で女奴隷に子供を産ませます。その子がイシュマエルです。ところがその後、高齢だった正妻が身ごもり、イサクが誕生します。

イシュマエルの子孫がアラブ人、イサクの子孫がユダヤ人だとされ、キリスト教の「旧約聖書」では「創世記」に記されています。紀元前16世紀頃の話です。

アブラハムは神から約束の地「カナン（現パレスチナ）」を与えられ、彼の子孫は「選ばれた民」となりました。

しかし、では「選ばれた子孫」は誰なのか、が大きな問題として浮上することになります。イサクなのか、イシュマエルなのか。これが対立の根源といっていいと思いますが、もちろん、これは紀元前の話。その後にはるかに長い歴史があり、両者の関係はこれだけでは語りきれません。

ただ、少なくともいえるのは、この出発点を知らないと、その後のことはよく理解できないということです。

そして、今から２０２３年前に誕生したのが、ユダヤ人であるイエス・キリストです。

イエスは両親ヨセフとマリアとともにユダヤ教の教えの下で生きていましたが、自らを「神の子」であるとし、ユダヤ教の選民思想や杓子定規な律法の解釈に疑問を投げかけたために十字架にかけられて処刑されてしまいます。

イスラム教の出現は最も新しく、１４００年前です。アラビアで生まれたムハンマドが天使ガブリエルの啓示を受けたとして預言者となり、ムハンマドの言葉がまとめられたものがイスラム教の聖典「コーラン」です。

イスラム教においてはアブラハムやモーセ、イエスはみな預言者で、その最後にして最高の預言者がムハンマドであるとしています。

一方、紀元70年にローマ帝国に約束の地を奪われたユダヤの人々は世界各地に散らばっていましたが、次第に各地で迫害を受けるようになりました。そして、とうとうナチスによるホロコーストで約６００万人が殺害されてしまうのです。

こうした迫害から逃れ、あの約束の地に戻ろうという運動（シオニズム）が始まっていたこともあり、国連は１９４７年にパレスチナの地をアラブ人国家とユダヤ人国家に分ける「分割決議案」を採択します。そして、翌48年にイスラエルが建国されます。

今回のイスラム組織ハマスとイスラエルの問題について「旧約聖書にある数千年も前の話を持ち出しても意味がない」と、切って捨てる意見もあるようですが、そうでしょうか？

実は、ユダヤ人とひと言で表現していますが、その中には黒人の存在もあります。この人たちの多くはエチオピアから移住しました。70年代以降、エチオピアの政情不安や飢饉により、ユダヤ系エチオピア人が殺害されたり餓死するという事態になっていました。そこで、イスラエル政府は彼らの救出作戦を遂行し、４万人もの人を脱出させたのです。

「同胞は見捨てない」という強い意志によるものでした。エチオピア系ユダヤ人はソロモン王とシバ王国の女王が恋に落ち、２人の間に生まれた子供の子孫だといいます。これは、紀元前１０００年頃の話です。

つまり、２６８３年前のことは教えないあるいは現実とはいえないとするわが国との違いはここで、アブラハム世界の人々との「ものさし」の違いは明白なのです。その前提を差し置いて、日本人がこの問題を論じ評価する言説が耳に入ると、虚しさを感じてしまうのです。

〔執筆者プロフィール〕
桜林　美佐（さくらばやし　みさ）
東京都生まれ。日本大学芸術学部卒。ディレクターなどとしてテレビ番組制作に携わった後、防衛問題研究家に。
著書に「奇跡の船『宗谷』」「海をひらく、知られざる海上自衛隊」「誰も語らなかった防衛産業」（並木書房）、「終わらないラブレター祖父母たちが語る『もう一つの戦争体験』」（ＰＨＰ研究所）、「日本に自衛隊がいてよかった―自衛隊の東日本大震災」（産経新聞出版）、「ありがとう金剛丸―星になった小さな自衛隊員」（ワニブックス）、「武器輸出だけでは防衛産業は守れない」「自衛隊と防衛産業」「自衛官が語る　災害派遣の記録（監修）」「自衛官が語る　海外活動の記録（監修）」（並木書房）、「本音の自衛隊（産経ＮＦ文庫）」「危機迫る日本の防衛産業（産経ＮＦ文庫）」など多数。